

第15回 夏期福音特別集会（4）

「全人」

――エペソ書第4章～6章――

1968年8月25日（鹿沢）

小池辰雄

使徒たちがじかに受けた福音 八方破れ 一つ キリストが一なる中心 一つ御霊のバプテスマ 全存在の打ち込み 聖言受肉体 全人 キリストの霊衣を着よ キリストに在りて神の赦し 愛せらるる子供のごとく 厳かな神さまの支配 神の武具 霊剣神言 神言が受肉化 体 祈りは神の力を受ける事態 一全

【エペソ4】

1 されば主^{めしうど}に在りて囚人^{めしうど}たる我なんじらに勧む^{すす}。汝ら召されたる召に適^{めし}いて歩み、2 事毎に謙遜と柔和と寛容とを用い、愛をもて互に忍び、3 平和の繋^{つなぎ}のうちに勉めて御霊^{みたま}の賜う一致を守れ。4 体^{からだ}は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、6 凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在^{いま}し、凡てのものを貫き、凡てのものの中に在したもう。7 我等はキリストの賜物の量に随^{たまもの はかり}いて、おのおの恩恵^{めぐみ}を賜わたり。8 されば云えることあり『かれ高きところに昇りしとき、多くの虜^{とりこ}をひきい、人々に賜物を賜えり』と。9 既に昇りしと云えば、まず地の低き処まで降りしにあらずや。10 降りし者は即ち万^{よろず}の物に満たん為に、もろもろの天の上に昇りし者なり。11 彼は或人^{あるひと}を使徒とし、或人を預言者とし、或人を伝道者とし、或人を牧師・教師として与え給えり。12 これ聖徒を全うして職^{つとめ}を行わせ、キリストの体を建て、13 我等をしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全^{まった}き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、14 また我等はもはや幼童^{わらわ}ならず、人の欺^{あざむ}騙^いと誘惑^{まよわ}の術^てたる悪巧^{わるだく}とより起こる様々の教の風に吹きまわされず、15 ただ愛をもて真を保ち、育ちて凡てのこと首^{かしら}なるキリストに達せん為なり。16 彼を本とし全身は凡ての節々の助けにて整い、かつ聯^{つらな}り、肢体おのおの量^{はかり}に應じて働くにより、その体成長^{からだ}し、自ら愛によりて建てらるるなり。17 されば我これを言い、主^{あかし}に在りて証す、なんじら今よりのち、異邦人のその心の虚無^{むなし}に任せて歩むが如く歩むな。18 彼らは念暗^{おも}くなりて、其の内なる無知により、心の頑固^{かたくな}によりて神の生命^{いのち}に遠ざかり、19 恥を知らず、放縱^{ほうし}



に凡ての汚穢^{けがれ}を行わんとて己を好色^{わた}に付せり。20されど汝らはかくの如くならん為にキリストを学べるにあらず。21汝らは彼に聞き、彼に在りてイエスにある真理^{まこと}に循^{したが}いて教えられしならん。22即ち汝ら誘惑^{まじわし}の慾のために亡ぶべき前の動作^{さきふるまい}に属^つける旧^{ふる}き人を脱ぎすて、23心の霊を新たにし、24真理^{まこと}より出づる義と聖^{よき}にて、神に象^{かたど}り造^{つく}られたる新しき人を著^きるべきことなり。

25されば虚偽^{いつわり}をすてて各自^{おのおの}その隣りに実^{まこと}をかたれ、我ら互に肢^{えだ}なればなり。

26汝ら怒るとも罪を犯すな、憤恚^{いきどおり}を日の入るまで続くな。27悪魔^{あくま}に機^{おり}会^あひ得^えるたさすな。28盗^{ぬすみ}する者は今よりのち盗すな、むしろ貧しき者に分け与え得るために手づから働きて善き業をなせ。29悪しき言^{ことば}を一切なんじらの口より出さな、ただ時に随いて人の徳を建^たつべき善き言を出して、聴く者に益を得させよ。

30神の聖霊を憂^{あがな}いしむな。汝らは贖罪^{あがな}の日のために聖霊にて印せられたるなり。31凡ての苦^{にが}・憤恚^{いきどおり}・怒^{いきどおり}・喧騒^{さわぎ}・誹謗^{そしり}、および凡ての悪意を汝等より棄てよ。

32互に仁慈^{なごけ}と憐憫^{あわれみ}とあれ。キリストに在りて神の汝らを赦し給^{ゆる}いしごとく汝らも互いに赦せ。

【エペソ5】

1されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效^なう者となれ。2又キリストの汝らを愛し、我らのために己を香^{かぐわ}しき香^{かおり}の献物^{ささげもの}とし犠牲^{いけにえ}として、神に献^さげ給^{たま}いし如く、愛の中をあゆめ。……

【エペソ6】

1子たる者よ、なんじら主にありて両親^{ふたおや}に順^{したが}え、これ正しき事なり。2『なんじの父母を敬え(これ約束を加えたる誠命^{せいめい}の首^{はじめ}なり)3さらばなんじ幸福^{さいわい}を得、また地の上に寿長^{いのち}からん』4父たる者よ、汝らの子供を怒らすな、ただ主の薫陶^{くんとう}と訓戒^{くんかい}とをもて育てよ。

5僕たる者よ、キリストに従うごとく畏れおののき、真心をもて肉につける主人に従え。6人を喜ばする者の如く、ただ目の前の事のみを勤めず、キリストの僕のごとく心より神の御旨^{みむね}をおこなひ、7人に事^{つか}うる如くせず、主に事^{つか}うるごとく快くつかえよ。8そは奴隷にもあれ、自主にもあれ、各自おこなう善き業によりて主より其の報^{おこ}いを受^うけることを汝ら知ればなり。9主人たる者よ、汝らも僕に対し斯く行^{おびやか}いて威嚇^{いかお}を止めよ、そは彼らと汝らとの主は天に在^{いま}して、偏^{かたよ}り視^みたもうことなきを汝ら知ればなり。

10終^{おわり}に言^{こと}わん、汝ら主に在りて其の全能^{いさお}の勢威^{せいゐ}に頼^よりて強^{つよ}かれ。11悪魔の術^{てくて}に向いて立ち得^たんために、神の武具^{ぶぐ}をもて鎧^{よろ}うべし。12我らは血肉と戦^{たたか}うにあらず、政治^{まつりごと}・権威^{けんゐ}、この世の暗黒^{くらき}を掌^{つかさ}どるもの、天の処^{ところ}にある惡の霊と戦^{たたか}うなり。13この故に神の武具^{ぶぐ}を執^とれ、汝ら惡しき日に遭^あひて仇^{あだ}に立ちむ



かい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。¹⁴ 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を胸当として胸に当て、¹⁵ 平安の福音の備えを靴として足に穿け。¹⁶ この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。¹⁷ また救の冑および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。¹⁸ 常にさまざまの祈と願となし、御霊によりて祈り、また目を覚して凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ。¹⁹ 又わが口を開くとき、言を賜わり、憚らずして福音の奥義を示し、²⁰ 語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

²¹ 愛する兄弟、主に在りて忠実なる役者テキコ、我が情況わが為す所のことを、具に汝らに知らせん。²² われ彼を遣すは、我が事を汝らに知らせて、汝らの心を慰めしめん為なり。

²³ 願わくは父なる神および主イエス・キリストより賜う平安と、信仰に伴える愛と、兄弟たちに在らんことを。²⁴ 願わくは朽ちぬ愛をもて我らの主イエス・キリストを愛する凡ての者に御恵あらんことを。

●使徒たちがじかに受けた福音

皆さんの目と顔が輝いています。もう私は何をか言わんと思っています。本当にうれしい。この御霊の輝きを、光をうちに持つと、輝きの人になる。底光りの人になる。女の方も化粧なんかいらん。神さまが、キリストが最高の美容師であります。キリストは最高の医者であると同時に、最高の美容師でもある。そういう何とキリストは素晴らしいひとだろう。どうぞ、皆さん、そういう底光りのひとにいいよなつていただきたい。第1回は第1章、第2回は第2章、第3回は第3章と5章、第4回は第4章、6章と、そういうように導かれてまいりました。

讃美歌370番の「目さめよわがたま」の最後のところを聞いていると、私は涙が出る。

「いつか、勝ちの日がきたならば、その勝利はあなたのみ力によって、ただあなたを讃えるだけだ」

という、この讃美歌の節は大好きです。いつかそれを歌いながら私はそこで倒れたい。こないだ、「わがヨハネ」(1968年8月18日武蔵野聖書講筵)と題して最後に語りました。「わがキリスト」、私はこの一道を死にいたるまで貫くつもりであります。これが私の使命であり、また、あなた方、私たちのこの群れの歴史的な使命であると思っております。日本に、使徒たちがじかに受けたところのこの福音の真骨頂、それを貫かなければいかん。そういうことでありたいと願っております。



● 八方破れ

では、第4章に入ります。

「されば主に在りて囚人たる我なんじらに勧む。」^{すす}

もうパウロの言葉は一言一言、重さがあつて、いい加減に読めない。こういうわけだからと。3章の終りがパウロの熱烈なる祈りであつた。「アーメン」と書いてある。

「²⁰願わくは我らの中にはたらく能力に随いて、我らの凡て求むる所、すべて

思う所よりも甚く勝る事をなし得る者に、²¹栄光世々限りなく教会によりて、

又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。」(エペソ3・20～21)

と。「されば」と言つて、今度は4章にかかつて、「主に在りて囚人たる我」と、徹底的にパウロは主の囚われ人。彼はローマに囚われて獄にいたが、

「いや、獄に囚われているのではない。私はそんな鎖に繋がっている者ではない」

と。もちろん、その時の囚われの仕方は鎖ではありませんけれども。パウロは、見えざる綱、愛の綱――ホゼア書に出てくる言葉です――その愛の綱でキリストに引っぱられているところの囚人である。これは愛の綱ですから凄い。この綱を誰が断ち切ることができるかと。パウロは誇りをもつて自分をキリストの囚人とした。

「誰がこのキリストの愛から私を離すことができるか」

と。ローマ書8章の終りはその絶叫であります。ローマ書8章の終りのところを読むと、もうすべてのものが吹っ飛んでしまう。どうぞ、皆さん、この聖書は、ただ「御言」といつて勿体ぶっているのではない。これは本当に我々に対する熱烈なる恋文である。これ以上の上の天来の恋文はないわけです。どんなラブレターもこのパウロの書簡にはかなわん。

1……囚人たる我なんじらに勧む。汝ら召されたる召に適いて歩み、²事毎に

謙遜と柔和と寛容とを用い、

ゆつたりと彼は、この力をおびているパウロは、自分が自分で力を決して私しませんから、その平伏しの姿からこういう言葉が自然に出てくる。

愛をもて互に忍び、

自分に何もかも期待しないところの八方破れの人。私は今日、「全人」と書きましたが、これは完全無欠の人ということではないですよ、この「全人」という意味は。「八方破れ」ということと、この全人とは同じことなんです。

「愛をもて互に忍び」と。キリストの愛でなければ、忍べませんよ。何か道徳だなんて思つてはいかん。パウロの勧めの言葉を道徳の次元に下ろして読んだらダメです。そうしたら、また新しい律法ができてしまう。たいていそんな読み方をしているわけです。どのような言葉も、

「ああ楽しいな、そうですとも」

と。自分ができなくなつていい。「そうですとも」と、魂がそういうような答えをしてくる



ような読み方になってくる。

●一つ

³ 平和の繋つなのうちに勉つとめて御霊の賜う一致を守れ。

「一致」というならばもう、御霊の一致の他にないわけです。「和」というならば、御霊にけるものの他に和がない。あとから畳みかけて「一」ということが出てくる。

⁴ 体からだは一つ、御霊は一つなり。汝めしらが召にかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。

望みも一つ。

⁵ 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、⁶ 凡ての者の父なる神は一つなり。

まあなんという素晴らしい畳みかけでしょう。嵐の一陣また一陣と吹きかかってくるような、怒濤が一波また一波と岩に寄せくるように。「一つ、一つ、一つ」と。この「一」という渾然一なるもの、分裂のなきもの。真とは一なりと。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と。パウロもヨハネもペテロも、

「キリストと一つなり」

というところに入った。それでは完全無欠か。決して然らず。その「一」ということが本当につかめたら、そうしたらばもういい。

京都、信州、武蔵野なんて集会は三つあるが、三つではない。これはやはり三つにして一なるもの。我々はこの集会は三にして一なるもの。三位さんみ一体というが、三集会一集会ということ。いや実に「三」はまた「多」を意味するので、多即一ということです。「そうかね」なんて言ってたんじゃないやダメだ。もし、皆さんの気持が分裂していたら、

「よし、私がこれを一つにまとめてやる」

と、それだけの気魄が、「一」というものが持っている気魄であります。

この森羅万象、もう実に数えきれないところの諸々の現象、それを統括しているところのものは「一者」である。プロチノス(Plotinus 205年頃～270年頃)がこの「一者」という言葉が好きだったようですが。あの昔のプロチノスというのは素晴らしい神秘家です。神学と哲学を両方持っていたようなやつです。

これが大宇宙を素晴らしい法則のうちに動かしている。もし、その一なるひとつの驚くべき何ものかがなかったならば、この森羅万象の在り方は乱れてしまう。混沌になる。

●キリストが一なる中心

コリント前書12章をちよつとみますと、

「¹² 体からだは一つにして肢えだは多し、体の肢は多くとも一つの体なるが如く、キリス



トも亦然り。¹³我らはユダヤ人・ギリシヤ人・奴隷・自主の別なく、一体と
ならん為に、みな一つ御霊にてバプテスマを受けたり。而してみな一つ御霊
を飲めり。」(コリント前12・12～13)

と。このコリント前書12章12節はきわめて大切な一節であります。私たちのこの身体はな
んと不思議な微妙な構造をしているか。人間の身体くらい素晴らしい有機体はおそらくな
いんじゃないでしょうか。これがちゃんと統括がとれている。この一なる霊があるから
です。この一なる霊が神の霊に本当に電流的に、霊流がつながっていなかったならば、人
間はどうしても行き詰まる。分裂する。そういうように一つの体。キリストが私たちの一
なる中心であります。キリストが私たちの中心。その中心が私たちの中にまた御霊として
中心を与えてくださる。聖霊という一番深い中心体がくると、もうギリシア人もユダヤ人
も奴隷も自主も何もない。

人の身体のごとく雑多な民族——たくさんの人種があります。どれでもいい——しかし、
そこにいったい共通なものは何かというところ、みんな人間であることです。どんなイデオロ
ギーをもって、イデオロギーでもって共通にしようとしたって、そんなことは無理だし、
そんな全体主義は真理ではない。そういう意味において普遍妥当なんてものはダメです。
それぞれの特異性とそれぞれの役割というものがある。しかし、それが何によつて統括さ
れるか。人間が考えるところのいかなるものにもよらない。それは人間というものを本当
に人間たらしめるところの最後のもの、神の霊です。

「神が霊を吹き入れたらば即ち、ひとは生霊、生ける霊となった」

「エホバ神土の塵を以て人を造り、^{いのちのいき}生氣をその鼻に吹き入れたまえり。人即

ち生霊となりぬ」(創世記2・7)

と書いてある。「生ける霊」(ネフェシユ・ハッヤ)という。このユダヤの神話は驚くべき真
理をもっている。神話だなんていつて片づけるからいかん。まあ、神話がどうのこうのと
やってるよね。どうして、神話という暗号をとおして示されているところの真理を見ないか。

「みな一つ御霊にてバプテスマを受けたり」

と。この「みな一つ御霊にてバプテスマを受けたり」というこのパウロの宣言が今、キリ
スト教界で果して現実であるかという。

御霊が御霊にこたえる。人間の魂はごまかしがきかない。どのような良きそうなものを持
つてきても、究極のものにぶつかるまではどうにもならないようにできている。今の青年
は——何とでも言つてなさいよ、いいから——傲慢だよ、そもそも。けれども、どんなに
威張りくさって何を言おうが、最後のものはただ一つのものを欠いているから、どうにも
ならん。それでどうかなるなら、それは人間ではないよ、そんなものは。化け物だ。私た
ちは、この神の大霊に接するまでは安きをえない。

「汝の懐^{ふところ}に休ろうまでは安きを得ない」



と、アウグスチヌスが言ったとおり。アウグスチヌスというやつも、いろんなことを思索して、実に暗中模索をさんざんやつたり、脱線をしたりした男ですよ。けれどもとうとう、休るうところにぶつかって、彼はもうただ神に向って告白せざるをえないというのがあの『告白』(コンフェスチオネス)という本である。

●一つ御霊のバプテスマ

「聖霊のバプテスマを施すために、私のあとに来る人がある」

と、洗礼のヨハネが言った。キリストは御霊のバプテスマを与えんがために来た。しかし、地上にあったキリストは、それはなさらなかった。ひとつ問題があるから。

「どうしても自分自身が受くべきバプテスマがある」

とキリストが言われた。それは十字架であった。

「十字架を通つたらば——贖罪の大業をしたらば、旧約聖書の事態を完全に自分が

全うしたらば——そうしたら、お前たちの中に今度は入っていく」

と。もうハッキリしているんです。霊はもろもろの霊があります。しかし、キリストの霊は贖罪をなしうるところのただ一つの霊である。私たちを完全に贖いとる。

霊肉渾然として贖いとられるのは、これからまだ先のはなしです。これは最後のところですよ。けれども、我々の信仰的現実において、今の私たちのこの現実においては、ハッキリと十字架とその聖霊ということで、私たちがどんなにガラクタであろうと、救われている。救いは確かである。自分のいかなるマイナスも決してキリストのプラスをマイナスにすることができない。十字架上の片一方の盗賊も、キリストは真つ先にこれを天界に、

「汝、我と共にパラダイスにあるぞ」

と言って、連れて行かれた。これが即ち、

「一つ御霊にてバプテスマを受けたり」

ということ。私たちが本当にこうやって、一つ御霊のバプテスマの中に入っていると、もう言わず語らずのうちに、本当に兄弟姉妹ということがひびいてくる。御霊のバプテスマという、この共通なる一つのものがくるといって、知らないまに本当に胸襟きょうきんを開いた人になるわけです。胸襟を開いた人が一番強いんですよ。人にだまかされる人が本当は一番強い。そういう、私たちはみなそれぞれの大事な、申し上げているとおり天下一品の存在で、肢えだであります。そしてこれは決してバラバラな個ではないから、みんなそれぞれの役割をもつて神の国を建設し、どれひとつが崩れても、石垣が崩れるというしまつであります。「私みたいなのはどうでもいいや」じゃないんだよ。それは天国を築くためには大事な一人ひとりです。大きかろうが小さかろうが、三角であろうが四角であろうが丸であろうが。何的であろうが一向に差し支えない。

そういう、神に即したところの自覚が天職という。日本人はその角度がないものだから、



何でもかんでも「大学、大学、大学」と言う。何ですか、こんな大学生の多いのは。そしてそれが大学生かと思つたら、大学生じゃない。石を持ったり、棒を持ったり。

「もうこんな国は滅びてしまえ」

なんて藤井先生が言つたけど、本当にそうだよ。神さまの審判にあうよ、こんなこととしてれば。私は藤井先生の「滅びよ」という詩を今思い出して涙が流れるな、先生のこの悲憤慷慨は。内村先生も、

「もうこんな国にはあいそをつかしたと言つてくれ」

と言つた。愛すればこそ怒る。泣くのです。青年諸君よ、本当に聖霊の人となつて立つてください。

●全存在の打ち込み

「^{からだ}体は一つ、御霊は一つ、望みは一つ、主は一つ、信仰は一つ、神は一つ」

と。この「一」はもう渾然たる一であつて、これはバラバラの一ではないですよ、パウロは数え上げているけれども。そういう、「神・キリスト・我」、「望・信仰・愛」がみんな一となつて、自分はそういう一者であると。現実には成りきっていません。しかしながら、このキリストを受けた現実にはその核がそこにある。

昔から、まあキリストを信じませんが、第一流の人物は、言葉の深い意味で霊的である。ロダンのある彫刻に盲人の方が触れた。「ああ、これは詩人の彫刻ですね。触れてるうちに、手に火花が散つた」という。私はその話を聞いて驚いた。ロダンはその彫刻に魂を打ち込んでいます。ロダンの彫刻がなぜもの凄いかというと、その一つひとつの彫刻に全存在が打ち込んである。「全人」とはそういうことなんです。なにか道徳的に全き人なんて、そんなことを言っているのではない。魂がそこにこもっているから、またそれに触れようとした盲人の魂がそのような魂であつたから、火花が散つた。そういう世界。ダビンチにしろ、あるいは名もなき画家にしろ、本当に打ち込んだところの在り方。これが全人的在り方という。その人がどんな人でありましても、その時その場において自分の生命をかけて事に当たっている。皆さんは今、生命を掛けてこの集会に立ち向かつています。それは全人的角度というんです。

そういう意味の「全人」というのは、普遍妥当的なあるひとつの型の人を言っているのではない。ひとりの人の全人性というものは隣の人の全人性とはちがう。また、昨日の我というものと今日の我というものは、表れ方がちがう。千変万化するが、しかもそれは一つである。

「私の正体はつかめませんよ」

と、私は言います。それはあるひとつのできあがつたイデーというような、理念というようなものでもって私は導かれていないからです。



ダンテ然り、ゲート然り。このダンテとゲートというのは両方とも本当に全人的なやつです。ダンテがどこかの古本屋の店先で本をちよつと読みかかったら、もうそれに没頭してしまつて、そこに王様の行列が通つたのを知らないでいたという。そのように打ち込んで、どんな雑音が聞こえてもそんなものは知らんというようなもの。目をつぶればもう直ちに深山幽谷という祈りの世界に入つてしまつて、電車の中もこれ深山幽谷なりなんて。そういうような角度にだんだんなつていく。

まあゲートなんてのは、しょつちゅう研究書がたくさん出るよ、なんのかんのと。それはゲートというのは千変万化しているからです。そして、それぞれの特殊な光においてゲートはダイヤモンドのようである。彼自身が、自分のことではないが、

「本当のものはダイヤモンドみたいだ」

と言っている。ダイヤモンドはいろんな光をピカピカと顕している。しかし、ダイヤモンド自身は無色透明である。この無。根底が無ということ。

●聖言受肉体

無は同時に霊ですよ。虚無ではない。私たちがキリストの十字架でぶつ飛ばされたところに住まいたもうところのこの聖霊。聖霊は万人に内住したもう。「なかなか、聖霊は入りそうありません」なんて、何を言っているか。十字架でちゃんと聖霊の入るところはできている。できているのに、できていませんなんて。それはキリストの十字架を本当に受けとらないから。行き詰まつたら平伏しなさいよ。自分で打開しようなんて思わないほうがいい。

聖霊がくると、その人のいろんな要素というものが、それを貫いて自由自在に表れてくる。人間だから滑つたり転んだりする。いいよ。そうしたらば、本当にいつも平伏して行きなさい。しかしながら、ノホホンでいるわけじゃない。平伏すごとに十字架の中をどしどし奥へ入つていくと、もうその先の、

「我は門なり」

の先のこの霊界というものは――霊界とは、なにか特別なところを言っているのではない――この現実界の中に霊界がちゃんとある。日常生活の中にもう限りなく豊かな神の恵みが見えてくる。見るもの聞くもの体験することはみな、本当にその人において化体され体現されていく。聖書の御言なんていつて奉つてないで、聖書の言葉が化体する、受肉する人にならないといかん、受肉しなくては。我々は聖言受肉体とされていく。もう終いには、

「聖書は要りません、みんなこれは受肉してしまいました」

ということになる。聖書研究会なんてのとおよそ違つた世界である。

⁶ 凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの^い上に在し、
超在し、



凡てのものを貫き、
貫在し、

凡てのものの内に在いましたもう。

内住内いま在したもうところのものである。神は一切のものに、万人に、およそすべての現象に在したもう。私は万物、万象、万人と書いた。そして、パウロにおいて、神・キリスト・聖霊は一つです。だから、

「神は万物に超在し、主は万象に貫在し、聖霊は万人に内在したもう」

と自然に書いてしまった。私はなにか、そういう波に乗つかると楽しくてしようがない。波のごとく。地のごとく、水のごとく、火のごとく、風のごとし。「四大」という。この四つの四大になる。

7 我等はキリストの賜物の量たまものばかりに随したがいて、おのおの恩恵めぐみを賜わたりたり。8 されば云えることあり『かれ高きところに昇りしとき、多くの虜とりこをひきい、人々に賜物を賜えり』と。

不思議なことが書いてある。

9 既に昇りしと云えば、まず地の低き処まで降りくだりしにあらずや。

地獄まで降り、また天界にまで昇る。これは「使徒信経」に出ているとおりです。

10 降りし者は即ち万よろずの物に満たん為に、もろもろの天の上に昇りし者なり。

11 彼は或人あるひとを使徒とし、或人を預言者とし、或人を伝道者とし、或人を牧師・

教師として与え給えり。

この「牧師」は今の牧師とはちがいますけれども。いろいろな役割を与える。皆さん一人ひとりが生涯をかけて――皆さんは、その人はずしたならばそこにひとつの穴ができるような一人ひとりです――そういう天職、文字通りの天職的な使命を持つ。この場合の天職というのは、なにかただ職業のことを言っているのではない。家でなにかをなさっている、みなこれ天職であります。

そういう自覚がきたら、あの「教育ママ」なんてくだらないものはなくなるわけです。とんでもないですよ。まずこの日本はダメです、そこから始まらなければ。もろもろの文化現象の根底には本当の宗教がなければ、文化はみなあだ花となる。福音はすべての根底、根の世界です。根が枯れたらどうにもならん。どんなに水やったってね。

●全人

12 これ聖徒を全うして職を行わせ、キリストの体を建て、13 我等をしてみな信仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、

「充満」という言葉が第一回から出ておりましたが。この「全き人」から私は今日、題を「全



人」としたのですが、しかし、それはいわゆる完全無欠という全さとは違うということを知っていただきたい。完全無欠なんてのはひとつもおもしろくないよ。そんなものは人間ではない。

孔子が「君子」なんて言っているけれども、あの君子というのは道を本当に求めている人が君子。また、道に達した人も君子というけれども。昔から君子というとなにかできあがったような、道徳臭いような――とにかく、臭いのはいかん。道徳臭かったり、宗教臭かったり――私は臭みのあるのは嫌いだ。もう二言目には「お恵み」なんて言ってみたりね。「あいつはなにかとぼけたやつだな」と。しかしながら、そのとぼけたなかに本当のものがどん坐っているような、人間中の人間と私たちはなりたい。

「あれは人間だ」

と。讃美歌の121番に「この人をみよ」というのがある。あの讃美歌は私は大好きだ。

「視よ、この人」(エッケ・ホモ)

と言ってピラトが指した。キリストです。

「視よ、なんたる人か」

という意味なんです。

「あのキリストというのはもう名状^{めいじょう}できない人である」

と。私たちはキリストとはちがいますから。罪びとです。しかし、この「視よ、この人」という質が――私たちはそれぞれの破れ器でありながら、分裂のない破れさ――そういうようなのがこの「全人」というんです。それが天界において本当に神さまが仕上げるところの、そういった意味の「全き人」とは、このところはちよつとちがいますけれども。

しかし、そのような全き人も、その土台となるところの、その分裂のなさの、要するに在り方が自然天然なんだ。あの風に吹かれている木の葉を見ると、

「視よ、この木の葉」

というようなわけです。もう本当にそれ自体がある渾然たる何ものかというよりか仕方がない。

まあ内村鑑三なんていう人はやはりそういう角度を持った方であつたようですね。昨日言ったことと今日言ったことがまるで反対のことを言って澄ましている。その時その時に自分を完全に打ち込んでいる。矛盾しているようだが実は、それは矛盾の偉大さという。それは大きな渾然たる一なんです。いわゆる矛盾ではダメです。けれども、魂が白熱的な魂は心配いらん。そういう在り方に自然になつていくから。

「ああいいな。あれはひとつも作つたところがないな。ポーズがないな」

と。私はあの「ポーズ」というのが嫌いだね。

佐藤繁彦先生というのはルター研究家でしたが、私が水戸高等学校のときに、あの人がルターの話をしに来た。私は最短距離で聞いていた。この先生は、ものの言い方が本当に



ぶちまけているんだ。佐藤先生は本当に自分をぶちまけて話している。先生の書いた本なんてのは誤植だらけ。誤植だらけの本だが、しかし、動いている。私は佐藤先生の本を読んで初めて本当の神学のよさというものがわかった。あの『ルターの根本思想』という本。あれで感激した。こんな素晴らしい情熱のこもった神学があるじゃないかと。そこで私は神学の勉強を始めた。

とにかく、ひたむきなものにぶつかって、感動しないような魂ではダメですよ、皆さん。「あれはキリスト教か」なんて言っている必要はない。いつわりはいかん。つくりごとはいかん。そういうようなのが、全人的な動き方です。悪かったときは、「わるかった」と本当にかぶとを脱ぐ。なにか体裁の説明だとか弁解はいらん。

そういうのが、私がつかまえているこの「全き」という意味なんです。「全き」というのは何といいますかね。「全人」というのはドイツ語でいうと、「ゲザムト・メンシュ」「ガンツェル・メンシュ」という言い方。全的でありまして、そこにこそ本当に神の力、聖霊がそういった魂には臨んでくる。

聖霊を受ける体勢は何かというと、それなんです、要するに。投げ込みです。自分自身の一足だけ出すのでも、手だけ出すのでもない――全存在を投げ込む。投げ込んだ世界には必ず聖霊がくる。

あの十字架の片一方の盗賊は投げ込んだわけです。

「もうしようがありません。私は生涯悪いことをしたから、極刑に処せられても仕方がない。せめても覚えてください。あなたが天国へいらつしやるときに」

と。もう投げ込みの魂です。そういう投げ込みの魂がキリストは大好きなんです。

「よし、お前は今日、私と一緒にパラダイスだ。さあお前を連れて行くぞ」

と。彼の魂は真つ先に天国へ入ってしまった。キリストの十字架を生まるにそこで受けているんだから、この盗賊は。キリストの十字架を一番じかじかに受けて、その恩寵にあずかったものは、片一方にいた盗賊だ。私はあそこのルカ伝19章のところは大好きだ。

「汝、今日、我と共にパラダイスにあるべし」

と。私の墓碑、墓にはそう書いてもらおう。

「こちら側はいいところだよ。どうぞ、いらつしやい。待ってますよ」

なんてね(笑)。そういうわけです、本当にね。

●キリストの霊衣を着よ

それから23節、

23 心の霊を新たにし、²⁴真理より出づる義と聖とにて、神に象り造られたる新しき人を著るべきことなり。

「新しき人を著る」とか、「キリストを着る」とか、パウロはよく「着る」というようなこ



とを言う。坊さんの方でも袈裟を着せられる。衣鉢。第六祖の話は「存じのとおりです。私たちのキリストの霊の伝わる世界は、「南無妙法蓮華經」でも、「南無阿弥陀仏」でも、本当に打ち込んだひとつの称名、しょうみょう称法において、いかなるものもこれに抗することができない。皆さん、祈れないなんてことはひとつもないですよ。

「わが主イエス・キリストよ、わが一切なる主よ。アーメン、ハレルヤ!」

と。これが祈りです。祈りの極致はそれです。頭で考えたらダメ。もう第一歩からダメです。投げ込みです、すべてが。これが全人的な在り方。仕事に向おうが、勉強に向おうが、何でもそう。そういうようなものが本当に、

「新しき人を着よ。新しきキリストの衣を着よ」

ということだ。キリストの霊衣を着よと。霊的な衣を着る。皆さんはなにも袈裟はつけてないが、これはキリストの霊衣をまとうている。本当に聖霊に満ちているときには、皮膚の周りにずーっと霊波が、霊的波動が起きているわけです。蚊が刺そうとしたって刺せない。あるクリスマスのときにも、凄く私たちは聖霊に満たされた。みんなの後に二人ずつ天使が立ったのを見た人がある。私の周りに七人の天使が守っていたと、その人は言った。そのようにキリストはなんと素晴らしい現在、活けるキリストか。今もなおいいよ天界に生きて、霊界に生きてありたもうこのキリスト。信ずるとは何か。このキリストの愛を受けとることなんです、活けるキリストの愛を。二千年前も今も同じこと。そして、その霊を受けることを具体的に、「衣を着る」とかいろんな言い方をするだけのはなしです。

●キリストに在りて神の赦し

30節、

30 神の聖霊を憂いしむな。汝らは贖罪の日のために聖霊にて印せられたるなり。

この「贖罪の日」というのは霊肉渾然として本当に天界に救われることを「贖罪の日」と言っただけです。私たちが言っている贖罪(十字架)とはちがう。「贖罪の日のために聖霊にて印せられてある」と。

31 凡ての苦・憤恚・怒・喧騒・誹謗、および凡ての悪意を汝等より棄てよ。

32 互に仁慈と憐憫とあれ。キリストに在りて神の汝らを赦し給いしごとく汝

らも互いに赦せ。

イエス・キリストから七度を七十倍もして赦された私です。

抵抗しているかぎりにはダメだよ、赦すわけにはいかん。しかし、「悪かった」と言ってくれば、それを私がいかに赦さなかったなら、私はパリサイだ。互いに本当に赦し、また迫害する者のために本当に祈る。もうしょうがないです。

「敵を愛する」ということと「迫害する者のために祈る」とは同じ質ですから。愛すると



は担うことです。この担いあげの魂は、力ある聖霊の人となったときにできる。この愛がくれば、いよいよもって私たちは力強い人にされていくから仕方がない。それがないといよいよだんだんダメになっていくから仕方がない。この事實はごまかしがきかない。事實はそうなんだから。霊的現実の事実というのはそうなんだから仕方がない。

●愛せらるる子供のごとく

それから5章の1、2節、

「されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效^{なら}う者となれ。

不思議な言葉だね。「愛せらるる子供のごとく、神に效^{なら}う者となれ」と。童心です。

「幼児^{おさない}の如くならなければ、天国に入れない」

という。童心を持たなければ天国に入れないということ。偉大な人間は童心を持っていたでしょ、ゲーテもダンテもみんな。なにか大人に成り上がったような、なにか出来上がったような妙なのはもう本当に御免だよな。私はゲーテのファウスト論の一番終りにそのことを書いた。

「ゲーテというやつは童心があつた。その点でキリストと通ずるものがある」と書いた。おきな心。幼児がおもちやで遊んでいるときは、あれはみんな全人の姿です。

2 又キリストの汝らを愛し、我らのために己^{かぐわ}を香^{かおり}しき香^{ささげ}の献物^{いけにえ}とし

て、神に献^かげ給^{おこ}いし如く、愛の中をあゆめ。

「己^{かぐわ}を香^{かおり}しき香^{ささげ}の献物^{いけにえ}として」という。花は姿もいいね。バラの姿もいいけれども、バラの香りはなおいい。香りある人。なにか香りの漂っているような人。これは聖霊の香りがその人をおして、その人らしい香りを発してくるわけだ。それはしかし香水でも何でもない。そういった献^かげ物。「神に献^かげ給^{おこ}いし如く」という。私たちが本当に神さまに芳しき人生涯が本当に香りを発した、聖霊の香りあるところの人。そういうことであります。何ともいえない気品というのは、この破れ衣の土の器に気品がある。何とも本質がつかめない。いわゆる立派さでもなければ。そういうようなことがパウロは自在に出てくるんだな。

●厳かな神さまの支配

6章は、始めの半分はいらん。10節から、

10 終に言わん、汝ら主に在りて其の大能^{いきおい}の勢威^よに頼りて強^よかれ。

「大能の勢威」というような言い方が三、四回出ている。「大能の勢威^{いきおい}に頼りて強^よかれ」と。パウロはいよいよ自分が殉教の死をとげるときが近くなってきたから、この後輩たちに、青年諸君に向つて、

「戦うんだぞ、この福音で。大丈夫、勝てるぞ」と言う。



「汝ら雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

とキリストは言われた。

11 悪魔の術てだてに向かい立ち得んために、神の武具をもて鎧よろうべし。

非常に戦闘的ですね。キリスト教は平和主義かと思つたら、これは戦闘主義だなんて――なにもそういう主義じゃないですよ――こういう言葉は自在に、みんな霊的な事態のことを言っている。キリストだつてずいぶん乱暴たふな譬えをしますよ。

「盗賊が家に入ってくるときに、まず強いやつを縄で縛ってからやるだろう」
なんて。

「戦争するときには、まず敵の兵力をみて、それからやるだろう。それだけの自信がなかったら、戦争するな」

なんてね、まるで戦術みたいなことを言っている。あのキリストの譬えというのは、そういったみな霊的な戦いにおけるところの、霊的に本当にものをつかまえるところの、みな卑近な分かりやすいことをもつて言つてらっしゃる。その譬えられたもの自身をなにも肯定しているわけではない。

12 我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威まつりごと、この世の暗黒くらきを掌つかさどるもの、天の処ところにある悪の霊と戦うなり。

「天の処」といつたつて、これは本当の天でない。非常に低い天のことです。悪霊がこの世のいろいろな政治や権威を掌握して、悪いことをやっている。政治なんてものはひとつの権謀術数の代名詞みたいなものだ。本当の政治はそんなものじゃないけれども。キリストはそんな権威はひとつも権威と思つてない。

「お前は何の権威で私を審さばくか。神によらなければ、権威はないはずだ」
と、ピラトの前でも言われたでしょ。

そういった悪霊に、サタンの虜とりことなつているところのこの世のいわゆる勢力だとか、いわゆる権威だとか、これが歴史でいかに人間の世界を踏みにじつてきたか。封建時代が然り。テレビやなんかでも出てくるね。まあひどいことをしやがったもんだなあなんて。みんな泣き寝入りですよ。寝入りどころでない。泣き死にだもんな。

「彼らの涙と血は今もお地下から叫んでいる」

と。それは空しくありませんよ。それは必ず、

「復讐するは我にあり」

と神さまは言つてらっしゃる。黙示録の最後のところで見てごらん、いわゆる権威者たちがみんな慌あわてふために逃げまどうことが書いてある。

そういう厳かな神さまの支配がある、キリストの支配があるということが、私たちが人生に対する本当の底力をもつて、平安をもつて、本当の希望をもつて歩きうるゆえんです。どう人に思われようが、どんな取り扱いを受けようが、誰に認められなかりうが、神さま



はご存じである。最後の日には、それは必ず良きようにされていく。

過去・現在・未来を本当の意味において掌握している、そのような魂。本当の義というものがどういふものであるかに貫かれているもの、本当の愛がどのような事態であるかに本当に力付けられて底力をいただいているもの、それがこの霊的次元の人物です。新次元の人物とはそのような歩き方を、老若男女いかなる人もその質を持っているということ。いいですか。

●神の武具

13 この故に神の武具を執れ、汝ら惡しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、義を胸当として胸に当て、15 平安の福音の備えを靴として足に穿け。

「至誠天に通ずる」というこの誠。「正義を胸当として」と。これも「正義」なんて言いたくない。「義」でいい。キリストの義です。義を胸当として。キリストの誠、キリストの義です。本当に神・キリストに安らつて、平安を与えるところの福音。どんな不安な所にあつてもキリストは平安であつた。嵐の中の、木の葉のごとく揺れる舟の中で、もうじき引つくり返るなんて思われる不安そのものところ、キリストは眠っていた。これが平安の福音という。まあなんと驚くべき人ですかね。

16 この他なお信仰の盾を執れ、之をもて惡しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。

まあいろんな言い方をしますが、大事なものはその次だ。

17 また救の冑および御霊の劍、すなわち神の言を執れ。

この17節、ここが私は一番好きな一句です。「救の冑」という。冑は武人の象徴みたいなものだね、頭にいただく。私は「救の冑」という言葉が好きだから、床の間に冑を置いてある。キリストの救いは私の側の一切に関わりないから。ダメなやつこそ救われる。これは親鸞の歎異抄と同じだ。

「仏法は善きも惡しきもへだてなしわが本願にもらすものなし」

という歌がある。「仏法は善きも惡しきもへだてなし」、善惡のへだてはないよと。「わが本願にもらすものなし」、この仏法の仏の本願にもらすものは一人もない。キリストのあの山上の垂訓の、

「父は善き者にも惡しき者にも、直き者にも直からざる者にも、正しき者にも

正しからざる者にも、雨を降らせ陽を照らさせている。汝ら、父の全きが如

く全かれ」

という言葉。救いは、「相手がどうであるかである」ではなかった。いかなる事態も救いはそれよりも強い。ルターがこんなことを言った。



「大胆に罪を犯せ。しかし、より大胆にキリストを信ぜよ」

と。これはルターらしい言葉だな。なにも「大胆に罪を犯せ」ということは、勝手にやっ
てごらんということを言っているのではないが。

「罪を犯してもよくよするな。それを機会にしてもつと大胆に信じかかっていけ」

と。これが本当の救い。そういう圧倒的なキリストの恵みです。

「お恵み」なんて言つてはダメだよ、「恵み」だよ。この恵みに圧倒される。まあ女の方なら、
「お恵み」でもいいけれども。私はなにか妙に飾った言葉は嫌いだ。聖書を「拝読」します
なんてね。本当は拝読でしょうけれども、「読みます」でいいと思う。どうぞ、「拝読」と言っ
てください、いいから。私は野人でありたいですね、魂の姿は大自然のごとく。

●霊剣神言

その次に、

「御霊の剣、すなわち神の言を執れ」

ときた。

「剣を投ぜんために来た」

とキリストが言われた。それは「御霊の剣」であつた。そして、それは「神の言」、神言、
霊剣神言ということです。即ち、御霊の剣と神言とは離すことができないものでござるぞと。
神の言はサタンをぶち破る。そして、サタンをぶち破る神の言はいかなる人をも救い上げ
る言である。サタンをやつつけるものは、何のためにやつつけるかというと、その人を本
当に救いあげる。どんな悪人も、それ自身が悪いんじゃない。その魂が何に仕えるか。魂
がまちがっている。その魂を本当に引っくり返せば証者となります。でありますから、こ
の「御霊の剣」という言葉は私たちにとって本当に救いの言葉です。

私はドイツのルッター教会に行つたときに、その梁に、

「私がなければお前は何ごともなすことができない」

と書いてあつたのをよくひとり眺めていた。牧師さんの話よりかあの言葉の方がいい。

「我によらずは何事をもなしあたわず」

は、

「我にあれば何事をもなしあとう」

と引っくり返して読む。キリスト自身が、

「人にはあたわぬ分を神はなす」

と言われた。「神はなす」ということは、

「神がお前たちを通してするぞ」

ということ。福音の世界は具体的な世界ですから、我々このダメなやつを、どうにもなら
ないやつをこそ、キリストは喜んで使う。



「そんなことは心配いらん。私はそういうのが好きだ。そういうのを使うぞ」と言つて、私たちをお使いくださる。御意の発するところ、そこに私たちは自分の思いにすぐることが生じてくる。行き詰まりを知らない人になってくる。

「^せ為んかた尽くれども望みを失わず、倒されるれども^しびず。これ神の大なる力の現れんためなり。日々にキリストに死に、キリストに生きる」

とパウロは言つた。まあ、パウロの言葉は言葉じゃないですよ。もう生命の息吹なんです。全部告白です。それを「研究」なんていつて、「なんだこの意味は」なんて、とんでもない皆さんも、聖書に向つてきている気合が変わつてきたでしょ。

「あつ、そういうものだったか。それでは、こんなうれしいものはない」と。そうしたら、何でもやつてくださいますよ。本当に展開していくから。

●神言が受肉化体

17 また救^{すくい}の胃^{かぶと}および御霊^{つるぎ}の剣、すなわち神の言を執れ。

と。これは言葉をただ覚えていいるのではない。この言が今度は、

「神言が受肉せよ」

です。パウロが「執れ」なんて言つたけれども、私は、「受肉せよ」と言いたい。言が受肉、化体^{かたい}しなさいと。神の言が受肉、化体してくれば、なるほど、

「我が言は靈なり生命なり」

というキリストの仰つたのがわかる。

聖書は、もし重かつたら、ヨハネ伝でも、ペテロでも、ヤコブでも、パウロでも、何でもいから、一冊破つて分冊にしてしまつて、ポケットに入れておけばいい。そして、電車の中でもどこでも読む。「生き字引」という言葉があるが、「生き聖書」みたいにひとつなつてくださいますよ。

「私はエペソ書を全部暗記して知ってますよ」

なんてね。それくらいに、若い人は、私はエペソ書が好きでたまらない、ヨハネ伝が好きでたまらない、ローマ書が好きでたまらないと思つたら、もう夜に日にとこれを読み破つて本当に化体していく。ただ頭で暗唱するのではないですよ。暗唱するときにまちがつたつて、

「あれは間違つたけれども、パウロよりか凄いことを言つてやがるな」

なんてね(笑)。そうしたら、パウロは喜ぶよ。聖書の言葉は決して固定したものではないから。

「全人」とは、固定した何か全さを言っているのではない。動いてやまないやつなんです、この「全人」というのは。いつも満たされながら、どんどんと展開していく人です。千変万化変わつていながら、実は本質においては一つなるものがグーッと動いている世界です。



ダビンチだとか、ロダンだとか、レンブラントだとか、ベアトリーベンだとか、ダンテだとか、ゲーテだとか、そういうのを見ていれば、その呼吸がわかってくる。しかし、キリストの福音を受ければ、ダンテなものぞ、ゲーテなものぞと、もう何でも把握できるようになってくる。私みたいなやつがなぜそんなことが言えるかというと、それはしょうがない。無色透明な世界はそういうことになるから。

日本の昔の坊さんの中に一流の画家がいる。そういうのに質的に絶対に負けないところの、聖霊に満ちてウワツと線を引いたら、その線はもはや再び引けない線です。そういう線を引くようになる。自分で再び書けないようなものが書けるようになる。そうなんだ。もう私はあれを書けないと。今度書いたらまた別な姿で、今度はまたそれが再び書けないようなもの。何でも本ものはそういうもの。ただ一回的なものです、すべて。私は自分の書いたものをまた読むと、「へえ、そんなことを言ったかな」なんて、自分でアンダーラインなんか引っぱって感心している。それは神の霊がかく語らしめているのでね。

17 また救の胃すくいおよび御霊の剣つるぎ、すなわち神の言を執れ。

本当に神の言を受肉化体しろと。こういう御言が本当に私たちの力となる、読めば直ちに。そして、この言の文字面ではない。この言の奥の言、根源語、その言が発せられているところの現実なんです。意味じゃない。内実なんです。生命的な霊的な内実をつかまえる。

●祈りは神の力を受ける事態

18 常にさまざまな祈りと願いとをなし、御霊によりて祈り、また目を覚まして
凡ての聖徒のためにも願いて倦うまされ。

その祈りは成就していくぞと。祈りこそ力強いものではない。最大の力はこの祈りである。キリストはなぜ、力ある人であったか。彼は祈りのひとである。祈りは神の力を受ける事態ですから。祈りそのものが何かではない。その祈りにおいて帰するものは即ち、体受しているんですから。自分のからだを投げかけ全身に受けとるとというのが祈りですから。言葉じゃないから。もちろん、言葉は発するし、沈黙でもいいし、そんなことはどうでもいい。霊界の力の世界はちょうど電波が今ここにきているのと同じように、霊的な波動はもう言わず語らずのうちにお互いに交流している。神さまがみな上からきてこれをやっている。

ある兄弟のことをさんざん祈ったけれども、その兄弟はとうとう死んでしまった。それは神さまの方ではちゃんと、

「それは向う側(天界)へやるよ」

と決まっちゃってしまっているのだからね。その祈りは聞かれないけれども実は、その聞かれないことにおいて、祈られた以上のことが聞かれている。それが私たちの御意に対するところの絶対信頼の世界です。祈りが、熱心でないから聞かれなかったとか、熱心だったから聞かれたとか、そんな勘定の仕方したらダメですよ。結果はどうなろうと、そんなこ



とはいい。とにかく、祈りにおいて神さまと交わって、それが深くなっていけばいくほど、すべてのことが最善となっていくことを信じこんでいくことです。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストが言われたのは、ただ現象面をキリストは言われたのではない。キリストに癒されたり、キリストがいろんなことをしたあの福音書のいろんな人たちが、本当の信仰に入ったかは別問題。いろいろな徴をおして、キリストはいつたい何を見させようとしているか。何を与えようとしているか。彼自身なんです。

「我を信ぜよ。わが業^{わざ}において信ぜよ」

ということは、業をただ信ずるのではない。「業において、言において我を信ぜよ」とは、「この我を受けとれ。ただそれはひとつの道にすぎないんだぞ」

と。それで、キリストを受けとることが本当の信の世界。彼らはそれが大方はできなかった。ある意味において仕方がない。聖霊がこなければ、そこまではないから。けれども、そこを突破して行つたのがあの使徒たちなんです。そして、とうとうキリストを受けとってしまった。

「我を視よ」

という、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロになつてしまった。

皆さんはダメのまんまで、「我を視よ」が言えるんですよ。ダメのまんまで。ダメだからこそ、キリストは入ってくるんです。そして、「我を視よ」ということがそこにある。その不思議な二重構造ができている――「二重」という言葉では当たりませんけれども――そこに本当の全さというものが、全人的な動きが働いてくる。なにかしらんけれども、内側からグーッと貫いたものが来てしまう。

19 又わが口を開くとき、言を賜わり、^{はばか}憚らずして福音の奥義を示し、²⁰語るべ

き所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

と。パウロも一生懸命で言っている。パウロも弱さを持っているから、もう大胆率直に言えるように祈ってくれよと。

●一全

それで、私たちはこのエペソ書をおして、万象は主に帰する。一切は、焦点は、一切の現象は主に帰するようにできている。

私たちはそのような驚くべき福音を受けるために、個、この個が新次元の人に御霊によって救いあげられ、次元の違ったものに私たちはなる。ということは、次元の違ったものを内に持つということです。そうすると、どんなに破れかぶれの間人であつても、何かもう違うんです、本質的に次元の世界が、自分のいるところが。あいかわらずダメだって、そん



なことはいいですよ。いいですか。そんなことを気にしていたら、下の方でどんなに整ったつて、そんなものは造り花だよな。それは本ものの、虫にくわれたような花だけれども、かわまない。

「神の奥義」とは、キリストそのものが神の奥義の現象体であると同時に、このキリストと結びつくところの個と、およびその個の群れ、エクレシア——「羔の婚姻」^{こひつし}——という最後の表現をもつて言われているところの、首と体の事態^{かしらからだ}——この不思議な事態、またある意味において大家族の事態、このことが奥義、神の奥義といわれたところのことである。

そして、私たちがこの世において万人救済に向って進むためには、どうしても最後にそういう聖霊の全人的な在り方をもつて実存していくこと。パウロが言った、もろもろの霊にとらわれて、その手下となつていくところの、この世の中の様々な現象に対して戦っていくことは、聖霊のこの力において神の大なる大能が、キリストの力が本当に現れる。そして、この20世紀の後半30年を突破するのは、そのような霊的^{霊的}新人としての本当の、その意味における全人。ぶちまけていくところの全人の、そのようなキリスト者。これをパウロはエペソ書において望んで、戦つて行つてくれる。

「必ず勝つぞ」

と。その戦いは、サタンは倒すが、人は救いあげていく戦いである。サタンを倒すのは、私個人が倒すのではない。あなた方一人びとりが倒すのではない。これはキリストが私たちにおいて勝つてくださっている。何の心配もいらん。

それで、どうぞ、皆さん、いろいろなことにこれからつくわすが、

「何も恐るるなかれ。わがうちなるこの霊に誰がかなうか。このキリストの霊にか

なうものが、いずこに天上天下あるか。このキリストの驚くべき生命力、力、愛、

これを何ものが離すことができるか」

と。一切を救い上げていくところのこの悲願。驚くべき祈りの担いの人となる。白熱的な人となる。

特に、青年諸君、たくさんのおこしமானものが今、日本はよこしまな霊が、唯物的、享樂的、いろんな様々な、傲慢な霊や、いろんなものが動いている。もう小学校から大学に至るまで、教育はダメだよな。社会も、さまざまの悪しきことがばをきかしている。これに対して自在なる戦いをなしていくためには、そのような自在な霊となる。皆さんが、特に青年諸君が、

「よし、やるぞ」

と。それで進んで行つてください。来年、おそらくここでまた再び遇いたいと思うけれども、そのときはいいよ、

「私はこの友人をこの福音の喜びにとにかく入れてきました」

と言って引っぱって来てください。この堂はあふれてしまつて入れないくらいに。いいです、



それで。

そういうことを私は望んで、皆さんと今お別れしようとしている。もうこのような、皆さんと本当に一つとなった、一全となった、この一全の事態を本当に聖名を讃え奉ります。パウロは私たちに御霊をもつて、この御言をかくも私たち迫ってくれた。もう言うことなし。^{はらわた}腸の底から皆さんは、

「然り、そうだ。私はもうそれでいくぞ」

と言つて進んでください。結婚問題で悩んでいる人がもしあったら、

「この私が分からぬものはもういいよ」

と。そんなものは蹴飛ばしてしまえ。そういうような乙女であつていいんですよ。そんなくだらない男となんか一緒になつたらダメだ（笑）。そのかわり、あなた方は気合があつたら、もう二義的、三義的なことはすつ飛ばして、

「よし、一緒にいこうじゃないか」

と、そういう青年男女が本当の天的恋愛というんだ。そういう結び方をしてくださいよ。もうその大事な一点でもつて火花を散らして進んでいく。これは必ず人生は本当の勝利です。おしまい。

